

神楽坂おにぎり物語

京町萌香

青山ライフ出版

この本は縦書きでレイアウトされています。

ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。ご了承ください。

本電子書籍は購入者の閲覧目的のためだけにファイルの閲覧が許諾されています。

目的を超えた転載、配信、送信などの行為は著作権法上、禁じられています。

いつもの朝の風景がここ神楽坂の白銀公園に広がっている。

登校する小学生を横目に見ながら直人は公園のベンチに座り、さつき近くのおにぎり屋で買ったおにぎり2個をペットボトルのお茶と一緒に食べていた。いわばこれが直人にとっての朝食だった。

期末試験も終わり、今日からは受験する進路によってクラスを選択する説明会があった。そんな説明会は聞いても無駄のような気がした。本当に進学できるやつが大学なりに進めばいいと内心思っていた。直人は大学受験はせず働こうと思っていた。

鮭のおにぎりを半分くらい食べ終えたところに、見知らぬ初老の男がそばまで来て、「ここ空いてるかなあ。君の横だけど……」

「はい、いいですよ」

と直人は食べかけのおにぎりを片手に幾分横にずれた。3人座れば一杯になりそうなベンチの真ん中に直人は座っていたのだった。その老人も袋の中からおにぎりを出した。ただ唯一違うのは老人は小さめの魔法瓶を持参していて、そこから暖かいお茶を飲んでいたことだった。

「君もおにぎりかあ。具は何か聞いてもいいかな」

「僕のですか？ 鮭とおかかですよ」

「ほう若いけど定番の食べてるねえ。最近はツナマヨネーズとか焼肉が入ってたりとか、昔と具も変わったなああって感じたな。」

俺もさやっぱり鮭、梅干、昆布なんかが一番落ち着くね。赤城神社の近くのおにぎり屋で買うのかな」

「そうです。あそこの美味しいですよ。海苔がパリッとしていて手作り感があります。おじさんもあそこか。この辺りうまいおにぎり屋ないですよのね」

「そうだな。あそこの親子でやってる小さな店さ。お母さんのほうが主ににぎつてるよだね。きれいな娘さんがいるだろう。ところで君は高校生だろう？ この時間学校はないのかね」

「ああ試験休みでないですよ。理系、文系、などのクラスわけとかで俺には関係ないので」

「関係ないって君は大学進学はしないのかな。今はほとんど進学するだろうに。俺は親父のやってた造園業を引き継いだから勉強はしなかったな。それにとにかく勉強が嫌いだったから今思うと植木屋でよかったと思うよ。」

数年前に高い木から足を滑らせ落ちてさ、足骨折よ。で今は庭の手入れ位はできるけどもう脚立に上るのは怖いなあ。植木屋でなく造園業だな今じゃ」

「いいですね手に職を身につけているなんて。俺は母子家庭だし母親にこれ以上負担かけたくないんですよ。」

小学生の時に親が離婚したんでずっと母親が働いてきたの見てきた。まして私立大に行けばお金はかかるし国公立もこの頭では無理だし、今は予備校の費用も大変なんですよ。一人この公園で朝飯食うこの時間が一番いいなあ。

学校に行く姿やこれから仕事に行くサラリーマンを目にするのを見ると、俺はこれからどうなるんだろうといつも迷うけど……」

「そうか、人生色々だもんな。君はみたところ真面目そうだし、もう自分で人生の

選択はできる年齢だしな。

俺はもう70歳の半ばだけど、自主的に朝公園の掃除をしているんだよ。ボランティアアって横文字だと言うらしいな。この公園は神楽坂でも結構広くて子供たちも安全に遊べるいい公園だよ。

通りから少し入るとこんな静かな公園があるのもこの土地ならではのだね。最近新しいマンションも増えて子供の数も以前より増えたみたいだよ。街の中の公園がいつも綺麗で癒しの場でありたいと思って毎朝掃除して、そのあとここで一休みつてとこだな。

もうかあちゃんも先に逝ってしまったし、1人でどうにかがんばっておるところじやな。じゃお先に失礼……」

そう言うとその男性は小さな手提げの袋を手にして去っていった。その後姿は山形の田舎にいるやさしい母方のおじいちゃんとなつた。足を少しひきずっていたのを目にした。木から落ちた時怪我したあとの後遺症だろうと直人は思った。

春の日差しが眩しく感じられるそんな朝の風景だった。

朝のおにぎり屋「米米かよちゃん」は相変わらず混んでいる。この辺りにお弁当屋がないのでこの店はかなり繁盛しているのだった。ありがたいことに朝は8時すぎには開いている。学生や近くの会社員が朝からおにぎりを買うのに時には並ぶこともあるのだった。狭い店なのでショーケースの前は混んでいると良く中の品が見えない。

大方この辺りの常連さんなので買うものもだいたい決まっているのだろう。

今日はひとまず登校しなくてはならない。昼に食べるおにぎりを2個、焼きたらごと日高昆布とついでにペットボトルのお茶も購入した。いつも親子でやっているこの店。お母さんと娘さんだろうか。母親がもっぱらにぎり、娘さんらしき人が販売している。やはり似ているから親子だろうと思う。

娘といつても30歳前後だった。直人ははつきり女性の年齢がよくわからない。もちろん高校生から見ればいい年上の綺麗なお姉さんにしか見えないが。

「あら今日は早いわね。学校行くのかな。朝あその白銀公園でよくおにぎり食べてるって言ってたわね」

「今日は学校なんすよ。面倒だけどさ良くないテストの結果返ってくるんで……」
ちようど人が途切れた時だったのでお姉さんが聞いてきた。週に数回朝ごはんを買いにくるので直人は顔見知りになっていった。いつも給食の時に当番の子がする様な三角巾をお姉さんは頭にしていた。ただ違うのは子供が学校でする白い生地のものでなく、綺麗なスカーフのようなものだった。毎朝その柄が違うのに気がついたのは最近だった。丸首のTシャツを腕まくりしていて、そこから色白の肌とずっと伸びた白い指先が器用に動く。首には金の細いネックレスをしていた。目立たないようにだけけど。薄く化粧をした顔立ちに直人は少しの動揺を覚えた。綺麗な人だと思った。なぜかおにぎり屋の人にしてはもったいないような気がした。たまにこうして一言二言話すことが少し嬉しい気分だった。別に直人だけにではない。来る人に親しげに話しかけている光景はよく目にしていた。

おにぎりが並べられているショーケースの右のほうに、卵焼きと漬物が並べられて